

第30歩 和泉正敏さんを偲んで

去る9月13日、職人らしく言葉少なで、はにかんだ笑顔が魅力的だったイサム・ノグチ日本財団前理事長の和泉正敏さんがご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

私が和泉さんと初めてお会いしたのは約二十年前、島根県勤務の頃でした。病院の解体跡地の公園に庵治石のモニュメントを制作するために松江を訪れられた折、亡父と懇意にされていたご縁で一緒に食事をさせていただきました。イサム・ノグチ氏の牟礼のアトリエをそのまま保存し、庭園美術館として開館したばかりで、苦労話などをお聞きしたことを覚えています。

和泉さんの人生の大半は、当時の金子正則知事やのちに県技監を務めた山本忠司氏に引き合わされた世界的彫刻家イサム・ノグチ氏の半生に捧げられたと言っても過言ではないでしょう。和泉さんと少し長話をする、毎回と言って良いくらいこの三人の傑人との思い出話が出てきました。特にイサム・ノグチ氏について、「この人はもしかしたら、宇宙人かなと思う時もありました」と尊崇の念をこめて述懐されていました。

和泉さんがイサム・ノグチ氏と出会ったのは東京五輪が開催された昭和三十九年。その頃、石の町である庵治、牟礼辺りに一つの「芸術村」を作ろうという構想があったそうです。このエリアに世界の著名な芸術家を呼び、アトリエを構えて住んでもらおうというのです。その第一号が彫刻家の流政之氏であり、イサム・ノグチ氏も制作拠点のアトリエを作りました。今で言う「アーティスト・イン・レジデンス」ですが、六十年近く前の大掛かりな話に驚かされます。

10月5日、イサム・ノグチ庭園美術館前の石材工場跡地に「高松市牟礼源平広場」が落成し、オープニングセレモニーが行われました。和泉さんが完成を心待ちにされていただけに、一緒にお祝いが出来なかったのはまことに残念です。でも、きっとイサム・ノグチ氏と並んで、あのはにかみの笑顔で温かく我々と新しい広場を見守って頂けていると思っています。

(参考)

・月刊「カーサブルータス」特別号2004 vol.47「a century of ISAMU NOGUCHI」

・「高志低居」(金子正則先生顕彰会編)

